

長崎大学で学んで、そのまま長大教員に

四

十年前、子ども自転車で文教キャンパスを走りまわっていた少年が、よ

もや長大の教授になるとは…一番驚いたのは本人でした。そう、木村正成教授は、長崎出身、長崎大学で博士課程を修了し、翌年度には助手、その後助教、准教授、教授と、いわゆる「ストレート」の道を歩んできました。

「長崎大学は、他大学から来られた先生方が多く、特に工学部は長大出身の教員は少数派。私の場合、大学院で博士号を取って、ポスドクとして海外で研究できればと思っていたら、助手のポジションが空いたので、そこからキャリアがスタートしました。教員のポジションは、ご縁も大切で、実力だけで就けるとはいえません。それでも、世界のスタンダードを目指して準備をしていけば、チャンスは必ずめぐってきます。今、私が取り組んでいるのは、新しい有機合成反応の開発です。有用な物質を合成する新反応の開発、医薬品合成や創薬の研究、二酸化炭素を炭素資源にした新しい合成化学の開発も行っています」。

最初から研究者を目指していたのですか？

「いいえ、大学に入学した当初は、漠然と大学四年で卒業して就職するのかなと思っていました。学部の講義で、当時名物教授と言われた先生方の講義に出会いました。テキストも使わず、チョーク一本でガンガン書いて理路整然と説明する。のめり込みましたね。独自の仮説をたてて、自由な発想で研究ができる研究者の仕事に魅力を感じました。とはいえ、研究は“千三つの世界”でもあり…」。

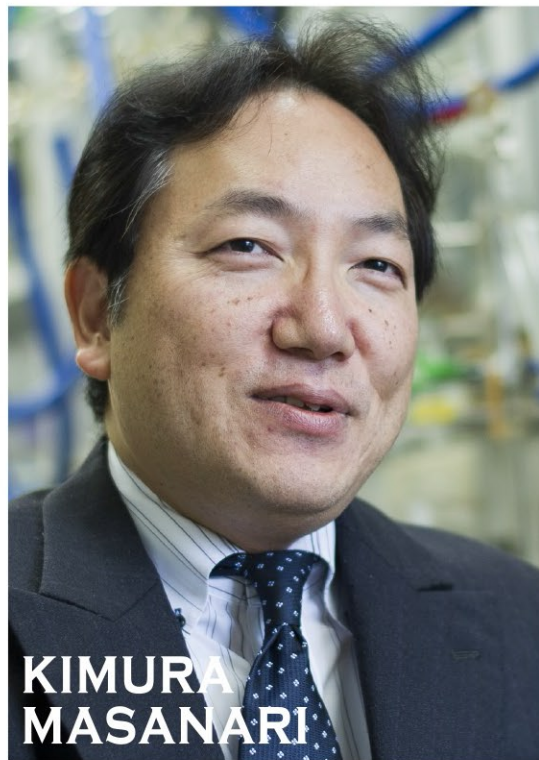
研究は千三つの世界。 規模やネームバリューより 切り口とアイデア、 そして熱意

大学院工学研究科

木村正成 教授

専門分野 | 合成化学(有機化学)

1990年長崎大学工学部卒業。1995年長崎大学大学院海洋生産科学研究科博士課程修了。1995年～2004年長崎大学工学部応用化学科助手(途中1年間米国マサチューセッツ工科大学化学科博士研究員)。2005年長崎大学大学院生産科学研究科助教。2008年長崎大学工学部准教授。2010年より現職。



KIMURA
MASANARI

千三つ？

「例えば私たちの研究分野ですと、新しい反応に千回挑戦しても、うまくいくのはせいぜい二、三回。つまり毎日やっても年に一回成功するかどうか。でも、これほどフェアで実力主義な世界はない。しかも、大学の規模やネームバリューは成功の保証にならず、研究の切り口とアイデア、最終的には熱意が成功の分かれ目だと思います」。

地方の大学でも十分やれる、と？

「もちろんです！ 仮に東京で四年間の有期雇用でやれと言われれば、二、三年で結果が出る研究をやるしかない。環境に応じた戦略といえますが、今の日本は数年スパンで結果を出すことに振り回されて、クリエイティブなものが出にくい気がします。地方でも地足をつけてじっくり取り組み、最先端の基礎研究をやっています。ノーベル賞の受賞者を見ていると、時間をかけることの大切さがお分かりでしょう。ただ、長崎にいいことタコツポにならないよう、積極的に外の世界と交流を持つ、相撲でいう“出稽古”をするように、学生にも発破をかけています。長大だからできることにどう気づいて目指していくかが勝負、という木村先生の力強い言葉が印象的でした。

研究は決してあきらめず、議論を重ねながらポジティブに！

